世田谷村日記

石山修武

十一月一日

朝九時より学科会議。学校の会議の大半は無駄なものだが、最近は様変りした。時々、キチンといなければ何が起きるかわからぬ状況がある。建築学科の将来を誤らぬようにしなければ。落し穴がボコボコ開いているのを痛感している。小事の中に大事ありの連続だ。午後世田谷に戻る。基礎工事屋さんと面談。夜渡辺夫妻と打合わせ。世田谷村オリジナルハウスでもある渡辺さんの家は鉄骨・屋根工事と基礎工事合わせて五百六十万円でまとまりそうだ。マネージメントを数えている平山がゆっくりではあるが大人になってきた。今がキチンとさせる潮時かも知れない。責任持たせて任せてみよう。渡辺さんの杉並の家は計画通りある種の住宅の原型にするつもりだ。少くとも繰り返し、注文がくるようにまとめてゆきたい。プランをフリーにしなければならないだろうな。それは、ハウスメーカーのフリープランのやり方を踏襲しなければならない。夜十一時三階に上る。

市根井君も一人でコツコツ自邸の木軸のきざみをしているようで、色んなところに隠れて進行中の現場があるのを忘れないようにしなくては。アッという間に十月は過ぎた。時間ばかりが通り過ぎてゆく。次女の友美が岐阜で妹島和世のマルチメディアラボを日帰りで見学してきた。考えるところがあったようだ。建てたばかりの建築が使われなくなってしまうのは建築家の責任重大だが、私だって他人のことは言えない。取り壊されたものもあるし、ゴーゴーと音が聞こえるくらいの非難を浴びたこともある。妹島は初めての逆風だろうが、何とか乗り超えてゆくだろう。家族は家内・長女・次女と日本女子大の出身なので、皆妹島びいきだ。私もいつの間にかそうなっているらしい。まことに多愛ない。本当にそう思っているのだから俺も人のイイおじさんだな。我ながら馬鹿だ。馬鹿ついでに、自分の娘が建築やろうなんて思ってるのを知ったのは最近のことだが、娘は私より余程独立心だけは強そうだから、極く極く自然に建築家になるんじゃないかと思う。それが良い事なのかはともかく私は応援することもできないし、教えることもしない。基本的には無関心なのだが、娘も私のことは全く無関心みたい。そんな風に他人の事を全く気にしない風を観察していると、奴は建築家になると思う。娘と競争する位まで柔らかい状態に頭を保持してないと、娘にケタぐられる、あるいはKOされるなんて事が起きかねない。アト十五年くらいか。それまで位だったら、まだ闘っていられるだろう。

十一月二日

朝から三名のスタッフが杉並渡辺邸の土工事監理へ。来年の三月は地下のスタッフ十五名のほとんどが各現場でモノを作っているスケジュールだから、地下は空っぽになるだろう。皆、陽焼けしてたくましくなって帰ってくる事を望む。頭脳労働も肉体労働も資本主義社会では金に換算され何の区別も無い。ある意味ではドライな効率主義が廻っている。それなのにそれが分離してしまう現実こそが問題だ。分離する現実は私達の幻想からやってくる。もちろん肉体労働ばかりでも非現実的である。自分で考えることに参加した、つまり設計した物体を、自分で作ろうとする、その一翼を担おうとする意欲の中にこそ新しい労働の質が生成する。

働くこと、仕事すること遊ぶことの新しい意味が生まれる。金のためだけにもう誰も働いてはいない。ウィリアム・モリスが遠くに視ようとしたユートピアは実は今、フリーター社会のはじまりとして現実化している。